



1927

1934

1953

1955

1963

1968

1969

1970

1975

1976

1978

1979

1982

1983

1984

1985

1987

1988

1989

Who he was

1927-1989

As a medical doctor...

1927年1月21日

- ニューヨーク市生まれ。生後11カ月で両親が離婚、ニュージャージー州ヴァインランド市に移り、養鶏場を営む母方の70代の祖父母に引き取られる。

1934年(7歳)～

- 大恐慌の影響で農場を失い、また祖父が急死したことにより、政府から食糧援助を受けつつ祖母と二人で安ホテル暮らしとなる。
- その後アメリカ公共事業促進局が運営する縫製工場で働く祖母を、新聞販売や自転車修理をして助けるも、ホテルが全焼して住まいと家財のすべてを失う。そのような暮らしの中でも決して挫けない祖母の精神力と決意に感銘を受け、またかかりつけ医のローズ医師の存在にも救われ、将来は医師になることを決意。

1949年(22歳)

- ニューヨーク州のコロンビア大学医学部を卒業し、1953年にMD(医学博士号)取得。専門は精神科。

1954年(27歳)

- コロンビア大学同僚インターン達の高齢者に対する傲慢な態度や言葉遣いに憤りを感じ転職、1955年からメリーランド州ベセスダにあるNational Institute of Mental Health(米国精神保健研究所)主任研究員となる。
- 地域の高齢者に関する縦断的・学際的10カ年調査(ボルチモア縦断研究の基礎となった)の主査を務め、その研究成果が“Human Aging”として1966年に出版される。研究チームには1975年に彼の2番目の妻となるマーナ・ルイス女史がいた。

1963年(36歳)

- 高齢者を対象とする心理療法である回想法(reminiscence, life review)を提唱。過去に対する執着や老化の現われとして、当時否定的にとらえられていた「回想」に積極的な意味を見出し、高齢者の精神疾患に対する治療に応用した。

1968年(41歳)

- 年齢差別を意味する「Ageism」という言葉を作り出し、年齢差別問題を扱った「ワシントンポスト」の一面に取り上げられる。その後Ageismは辞書にも取り入れられ、一般的に広く用いられるようになった。

1969年(42歳)～1970年(43歳)

- 上院の高齢化問題委員会において、関心を持つ国会議員に働きかけて、ナーシング・ホームにおける虐待に関する報告書をまとめあげ、改革案の法制化に向けて取り組む。ナーシング・ホームに対する抜き打ち的な立ち入り調査にあたっては、消費者運動で著名なラルフ・ネーダー氏とともに活動することもあった。

1975年(48歳)

- バトラー博士の活躍もありNational Institutes of Health(国立保健研究所)内の組織としてNational Institute on Aging(国立老化研究所)が設立され、初代所長に任命される(～82年)。



- 20年間の研究者としての成果をまとめた“Why Survive? Being Old in America”『老後はなぜ悲劇なのか? アメリカの老人たちの生活』刊行。

44
論評 バトラー博士が
訴えたかったこと 大迫政子

この著書において彼は、若さや生産性に重きを置く米国社会では、高齢期は悲劇であることが多いとしたうえで、これからは保健医療、年金、居住政策はもちろん、社会全体で高齢期についての考え方を抜本的に変革する必要があると提言している。そして、高齢期が悲劇である必要はないし、米国人が豊かな高齢期を迎える社会を創ることは可能であると強調している。

1976年(49歳)

- “Why Survive? Being Old in America”が、ピュリッツァー賞(一般ノンフィクション部門)を受賞。
- マーナ・ルイス女史との共著“The New Love and Sex After 60”を刊行。米国においても、公には語られることが少ない高齢期の愛と性の新しいあり方について、真摯な提言を行う。三十余年後の今もベストセラーとなっており、特に高齢期に入るベビーブーマーにとっての良い手引書となっている。

1978年(51歳)

- 再婚した妻のマーナ・ルイス女史とともに初来日。第11回International Conference on Gerontology が東京で開催され、参加。その後WHO主催で開催された「老年問題に関する京都国際シンポジウム」に出席。京都国際会議場において講演を行った。

50
発言 WHO主催京都国際シンポジウム

「エイジング研究—その課題と目標」と題する日本人に向けたおそらく初めての講演において、博士は宗教と科学に触れながら、人口高齢化という人類初め

での経験に対する新しい世界観創出の必要性と、望ましい精神と行動について、死や地球環境問題にまで踏み込んで語っている。博士の日本デビューはその哲学的な深い見識が、感銘と感動をもって受け止められた。

これ以降1997年までに数回の来日があるが、緑茶と日本食を好みフライトも必ず日航を指定するなど、バトラー博士の日本びいきはつとに有名であった。奇しくも2004年秋、国際アルツハイマー病協会京都会議における京都国際会議場での基調講演が予定されたが、マーナ夫人の病気により来日は実現せず、ビデオによるスピーチとなった。夫人は2005年に67歳で逝去した。

1982年(55歳)

- マウント・サイナイ医科大学に全米で初めて完全な老年医学部が設立され、初代学部長に任命される。すべての医学生が入院・外来ともに高齢患者に関わること、老人医療の臨床実験、あるいは医師・医学生・インターンが患者の自宅を訪問するなど、博士の提唱した包括的かつ実験的なプログラムが次々と取り入れられた。

- ウィーンで開催された第1回「国連高齢化に関する世界会議」において中心的な役割を果たす。

- 米国議会における社会保障改革委員会において、平均寿命の伸長と退職年齢の引き上げの関係について証言。レーガン政権下における委員会の議長は、後の連邦準備銀行理事長となったアラン・グリーンズパン氏であった。

1983年(56歳)

- ハーバード大学により設立・運営されているザルツブルク(オーストリア)における公開セミナーでは、毎年様々なテーマが取り上げられるが、この年は「人口高齢化」がテーマとなった。バトラー博士が中心となり、世界の第一人者を

集めたこのセミナーのキーワードは Productive Agingであった。

53
発言 ザルツブルクセミナー

1984年(57歳)

- 在日アメリカ大使館付属文化センター(アメリカンセンター)の依頼で来日し、東京と福岡でレクチャーを行う。コーディネーターはお茶の水女子大学袖井孝子助教授が務めた。

1987年(60歳)

- 朝日新聞社主催の国際シンポジウム「高齢化社会を考える」出席のため来日。「可能性に富んだ新長寿時代」と題する基調講演を行う。このシンポジウムを後援した山之内製菓の森岡茂夫社長との出会いにより、日米に高齢問題の調査研究・広報啓発等を行う機関を作る構想が、具体的に動き始めた。当初の機関名は「International Leadership Center on Longevity and Society 国際長寿社会リーダーシップセンター」と名づけられていた。

1988年(61歳)

- 笹川記念財団主催シンポジウム「Who is Responsible for My Old Age」がNYで開催され、日本からは行天良雄氏、樋口恵子氏、袖井孝子氏、坂東眞理子氏などが参加。米国からはバトラー博士をはじめ、元ファーストレディだったロザリン・カーター女史やベティ・フリーダ女史が参加し、高齢社会における個人・家族・地域・国家の責任と役割について、活発な議論が展開された。

10 ~ 14
寄稿 長谷川和夫
袖井孝子
紀伊國献三
樋口恵子